

近江縣物語  
卷之一

^ 13  
3301  
1



六樹園先生著 紅翠齋主人畫



近江縣物語 全部五冊

書鋪 畊書堂 瑞玉堂 螢雪堂 宇多閣

近江縣物語序

ひととせ近江國よまろりて月さらしとあり  
とりのにたに山里たのぐらふ小泉もあけびて  
とひらふ人すくまうらけおろりや秋夜志わ  
やうよありそくしきくぐりりたれむ龍乃  
何ち色も例なむびおぼくおころりむとく  
いりまいてうちかひらびつ建もくごちおく  
かこえぬものよはらひめ秋をまき  
りるづもあけぬなうたはとく神さびる  
翁のあらびらちあけぬとあつめておく

大正十年八月廿九日  
本大學出版部 贈

近江縣物語卷一



こりともありあつちもりれどむらびとてさ  
紙ろりてだもこのまにちりはけつこの  
ぶ後なごにけりけりきりきりきりきり  
物後きりけりあつてよとらふさし  
草とらんも物うくてさささささささ  
ちついついんてさささささささ  
おほらうせん

六樹園

近江縣物語目録

第一ふむむむ

此巻ハ卷原の孝光が素初淋まわてを設けたり。  
まよえりけりありけりけりけりけりけりけり  
ほりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
ささささささささささささささささ

第二せいがいん

けまの板原保備同齋光強盗とありけりか  
まの板安世が子に上梅丸送るにけりけり  
まのせんといふと同中子や常人といふ者  
まのの英計とありけりけりけりけりけり  
園一けんといふとありけり

第三すのき川

此のまき川は、河に流るる多し。盗人なりとて人  
を初め、しりれとて、くまびぬる。後、後、のたふし  
者、感ドて、引つとて、屋、入、り、とて、とる。

第四草まら

此のまき川橋安世が、家、次、入、来、て、糧、積、み、る。び、菌、生  
と、し、ひ、ゆ、り、。暖、房、の、た、ふ、し、梅、丸、と、と、る。  
都、山、に、せ、や、り、。梅、丸、途、中、お、世、人、の、家、に、泊、り、て、  
あ、せ、が、あ、乃、婢、を、た、も、け、て、老、人、が、あ、り、と、と、る。あ、り、

第五山のとぬ

此のまき、夜、及、丸、し、り、ぬ、す、び、。菌、生、を、書、ま、せ、ん、と、て、  
菌、生、か、ん、り、。お、ち、り、。梅、丸、法、師、の、命、を、す、し、  
た、は、都、に、の、げ、ゆ、り、と、と、る。

第六ひもぎ

此のまき、常、人、盗、賊、。降、糸、。山、に、ち、り、。盗、賊、大  
を、取、り、。秘、書、。凡、品、。乃、湯、と、。事、ま、り、  
あ、り、

第七いも

此のまき、人、金、割、。高、し、。盗、の、事、内、に、て、ね、又、の、あ、り、。お、世、人、  
を、初、め、。し、り、れ、と、て、。命、を、ひ、け、ら、れ、て、金、割、が、あ、り、。お、世、人、  
を、初、め、。し、り、れ、と、て、。命、を、ひ、け、ら、れ、て、金、割、が、あ、り、。お、世、人、  
を、初、め、。し、り、れ、と、て、。命、を、ひ、け、ら、れ、て、金、割、が、あ、り、。

第八袋のり

け、ま、り、。盗、賊、。女、を、。や、せ、川、。と、び、さ、り、

あるの常人梅丸に蘭生を要しんとて、  
ゆゑぬ物とわけて、又梅丸姫がすめにて、  
と雲より、梅丸は入り、夜半入りて蘭生とつれゆん  
とせし、安世も入りて、梅丸了、  
まゝの事とす。

第九 石山寺

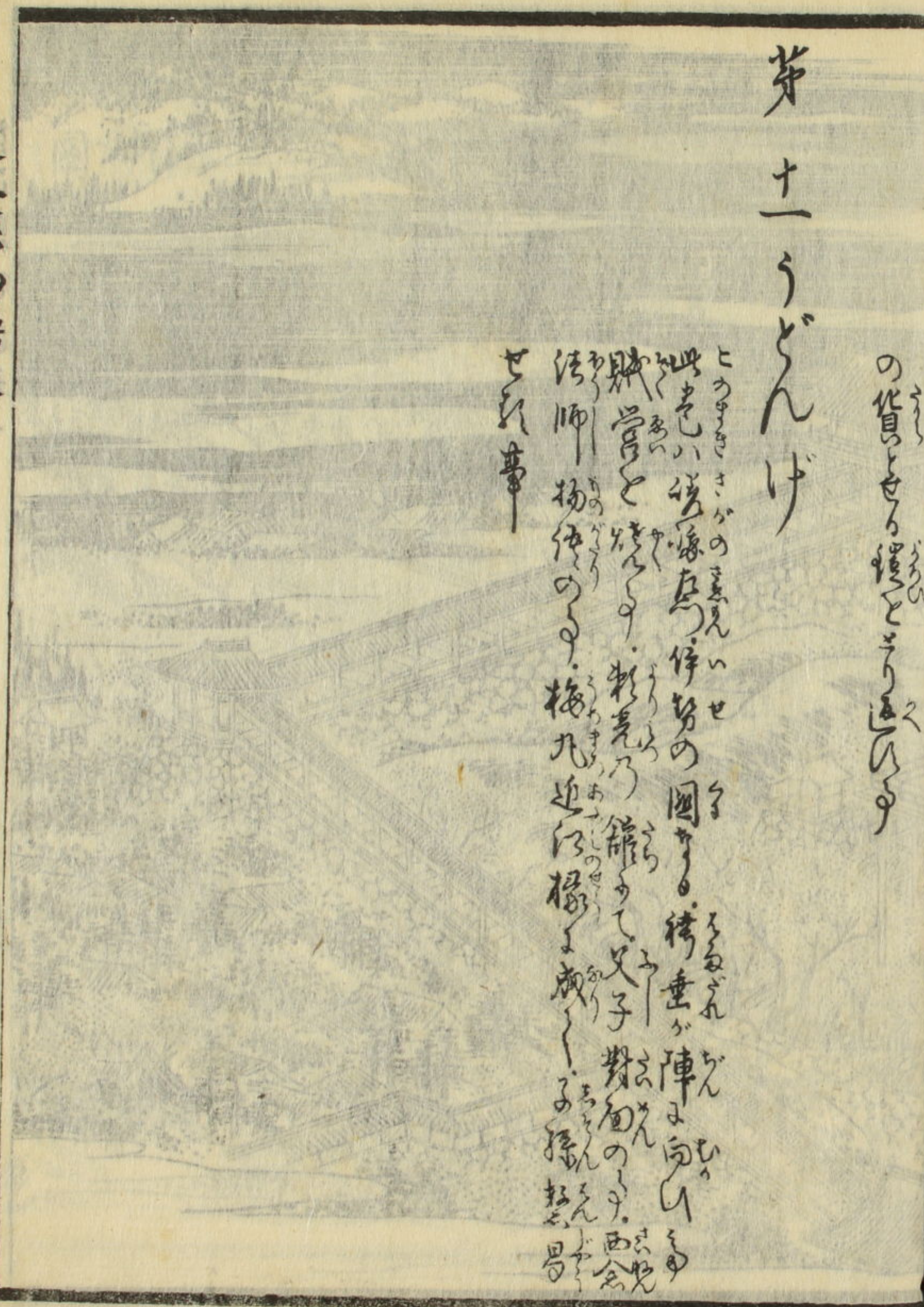
このまゝ、安世梅丸とて、  
時梅丸を射て、  
ひて、  
梅丸了、

第十 田村將軍

このまゝ、保昌、  
此を、  
梅丸了、  
の、

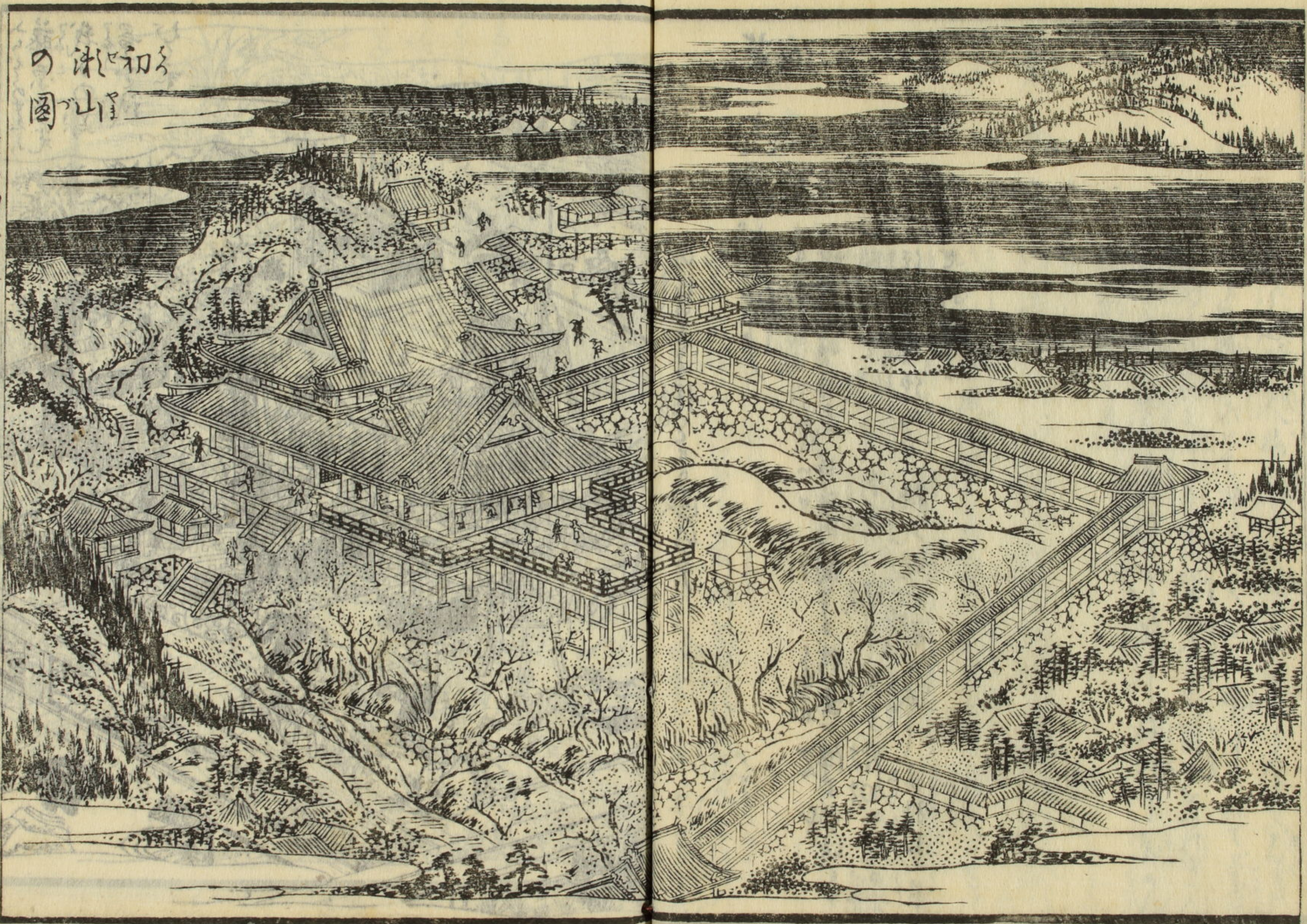
第十一 うどんげ

このまゝ、  
此を、  
梅丸了、  
の、



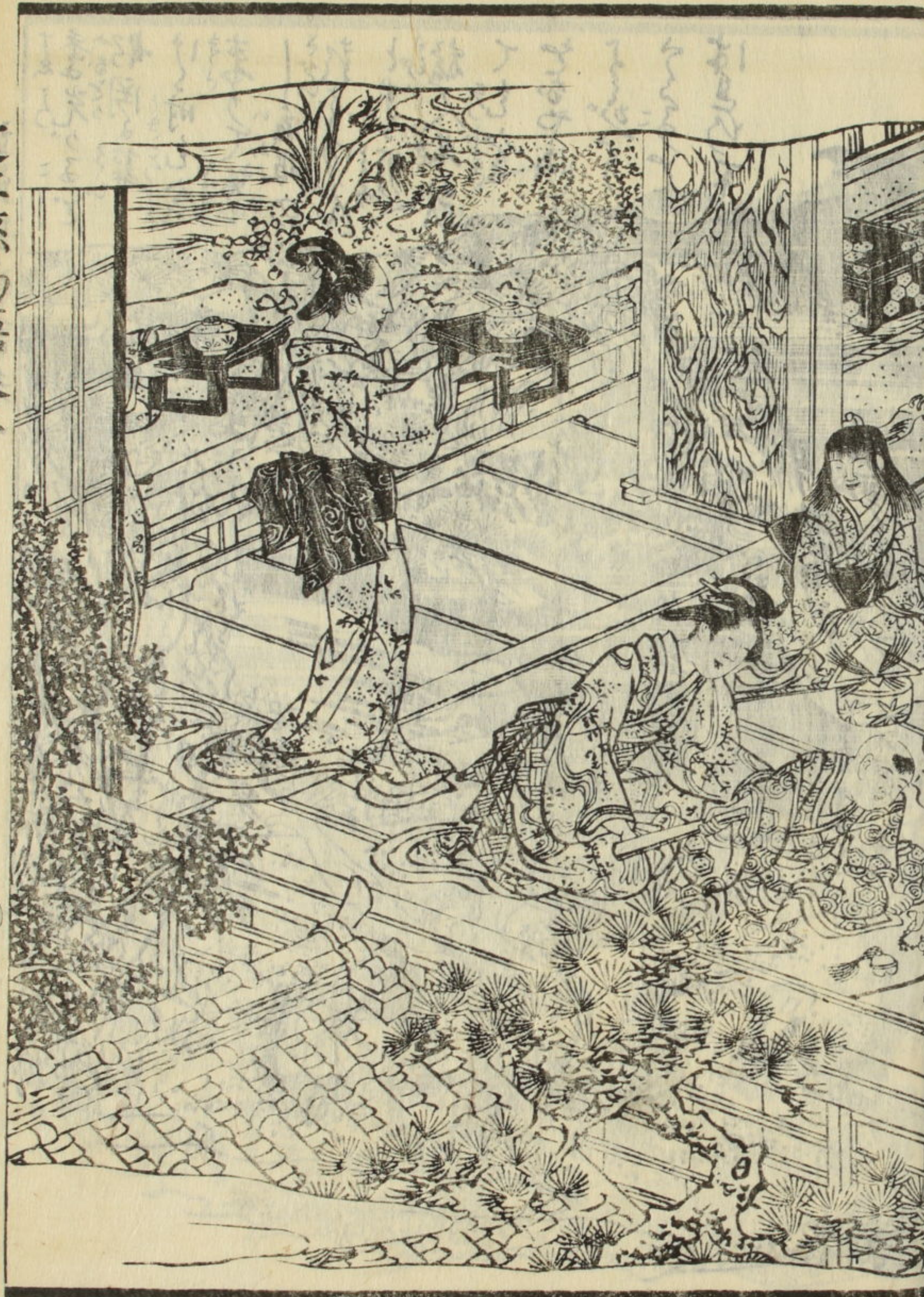
の 洲に初る  
園が山

近江原物吾卷一



近江原物吾卷一

五

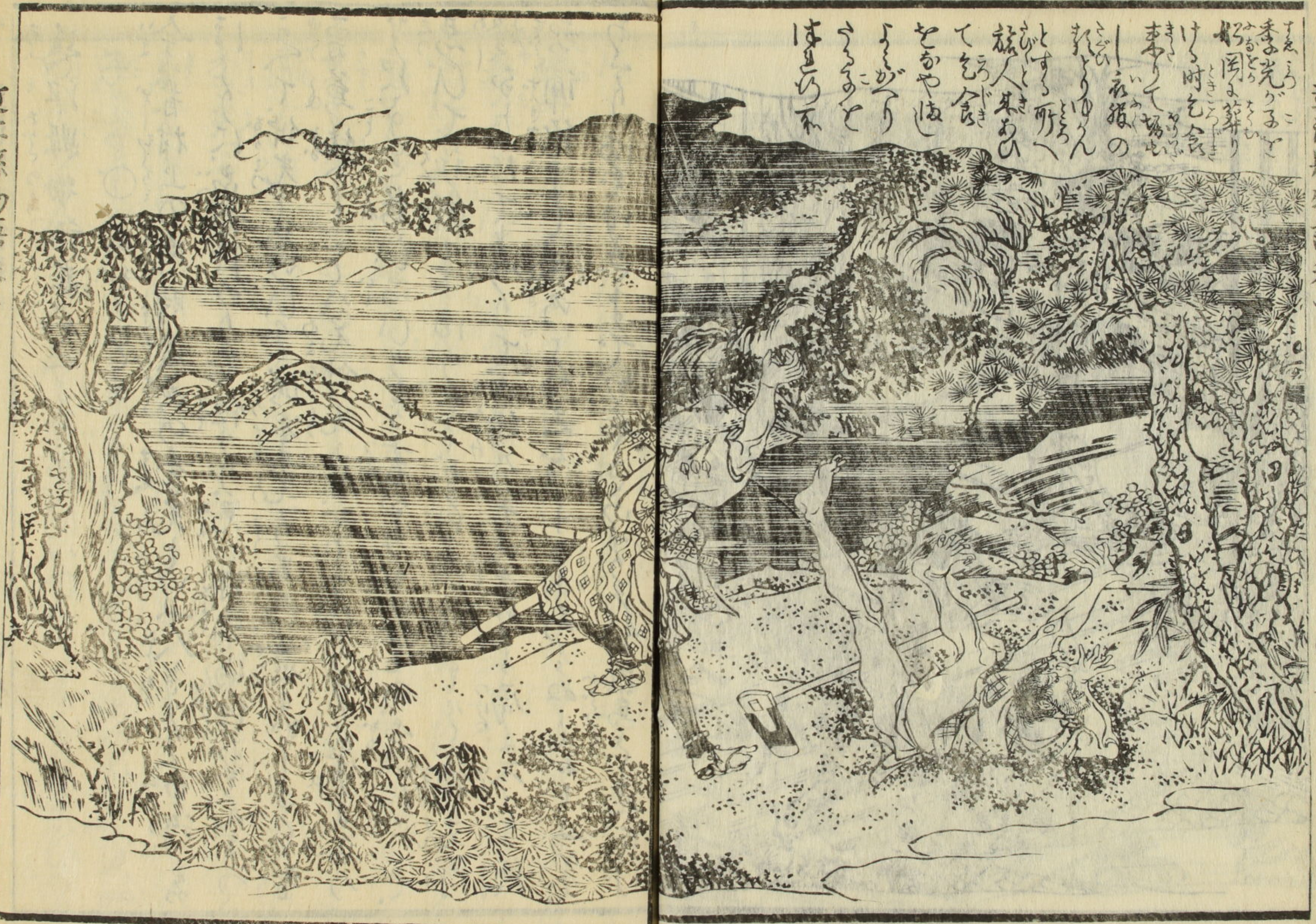


藤原季光  
 我子の志  
 量と試  
 むす不





すまろがまて  
季光がまて  
好問の舞り  
けり時を合  
事りて場  
いかに  
おの  
おのりゆん  
とす所へ  
旅人某の  
てを食  
とあやぬ  
よがり  
うらと  
はとの不











腰高くかけくも男の松やうのきこるが包のすて  
 あらとてえんて敬馬く顔うあわらむけくまわらるは  
 此兒ふきりに泣わーれを又こまうな寝ておて  
 あへ塚を覗えくやがてまきーのて兒を  
 抱きこりるにいよく類い泣き純バまけび  
 ふとらまおーくくのわおいうまするふりしわ  
 らめもせびまのりをれば此旅人かの包を  
 おして立あがをけをかかおたま何てく  
 者て包り多とけくびきられバ旅人ハの  
 下りぬげ時あま持る杉をまげてられバ火  
 とあ何やれも見えバ旅人おすびとてん





多どのべても食が腰いつも右のみにえりさく  
 てぐいの事投らればさくくぬて彼場宮の中へ  
 おち入ぬがさぬハサえくくくくとなりて籠あか  
 るべくも何とび籠人ハサぬどもあふふ又也の思  
 せどとあまかーいれ色脊又負て犬齧まらるハ  
 ちくくつてさむわつげなぞきーうひ事らんうた  
 かのねくままーべさうハ無慙のぬすびとやつとあ  
 ぢりりつして啼り兒の脊うちたきしはく  
 かごせくといひひくしてのどにあゆしてをさるひき  
 けも食ハ塚宮は投られらして棺の角にて櫓を  
 おちさるく志をー籠入る籠がやうく人づらつきて

宮をちひ出く見るに有ー色もなすく兒も籠人も  
 いづちりりまん足へびはるにてもかやつ腰刀をばいさ  
 換ふらんおたてんはまきりよもせられぬい  
 ぢれハおのくろき事飛鳥のどくかさくはさうし  
 せよハおをろしき者をも何りなれと舌をさうひ  
 ばく糞おとーたる物をもあらしもさうくさうり見  
 せど竹にしゆるさう引鋒又ハ紙めて作りたる  
 鼓人形なと棺の底よのこりも乃もめて鏡よ  
 かくべき物もなれががーらうれてきわぐんとす  
 ーハ籠をけくくくさうりもさうりも事うた  
 右ハ兒うたーだの二のさうりもをた右のさうり

近江縣物語卷一

十三





ろしひやどちそ糧藉の計り振廻ればさあう  
 官兵をばけい一是と責めどもえづくあきりあ  
 之りて賊徒の爲よ兵器を奪れあうもぶうは  
 逃ゆ者のを多りけは保脚あふ名を積ぶれと  
 ぶいては此のいづく仰おそしりつとを一日保輔ぬ  
 人らを集り酒宴あてりいほ家今いら安し味方  
 かく大軍に成ぬれば齋明と調にあや不日は都は  
 いらん但我軍中兵糧多うべ汝等兵を二高良  
 良策ありやといへを調伏九とり者進むゆ  
 つひるいこハか一こ手は從でこそめ古語は三軍  
 いまぶ動ぶれど糧草まづ行とせりてハ餉と

向うけの事第一の軍謀にそ我ともかくるそも盜賊  
 乃名をとり凶残を以威どがやうそくハ姑息の愛  
 婦人の仁かど顧りべきやうし調伏九が存初ハ軍  
 勢は至るころ豪民の家にお入り財寶牛馬ある  
 限り奪ひとりりるんハ糧は夏兩と作すべくや  
 といへを多衰れとりるがいく道のゆくてに當り  
 やつをくが家の物らんといはれしりの覚悟あそ  
 かねハ遊まじや女をく老少をいをび引くまで  
 陣中につるだ高札をいして身のあらを  
 出さ者ハ返一つはすべく觸あせぬを親  
 離るる別れ者ども財を惜まび持来りては

たりて保りいんずらんに八陣中の人ぐ居ながら  
 ら過分の財をえいあふびやとくを禱がねを  
 おてあられいしくも中らつるか。此計我を  
 かすひより。昨日まで八陣はよき女をくそのも奪ひ  
 て谷よけりあつてく園の伽しなせられど今日  
 りりハ先サ美悪のまきひかくけりて軍才に  
 繫かかくべーとして其旨三軍に觸るせ身價又  
 随ひて生捕の賞あつてーとつひつれ械勢  
 こもりてたやをれしるか女をの二十人三十人か  
 めらるハ千両の貝を拾るもやとるらん殿  
 置く。渡分の賞も飲んとしていさみや後らびり

其頃禱がねを伊勢國鈴鹿山よの麓り内りるが  
 園を悩まし財寶を集むべーとして賊をいり  
 てとつにつろし目バ伊勢尾張美濃近江の百姓  
 等あそれまふひく男ハ田之をとり止め女ハ  
 業とすてびひすすりて園を守りとりけり  
 その近江國神崎郡神崎の里は橋安世とく  
 人ありり祖又ハ近江の女あつて何りけるか  
 事とすくことやうてかく田舎よりりて世  
 していともめりる衛生となぐりむせあ一人  
 とらり顔うつくしく姿だをうたて絲竹乃  
 道ハはかり歌のたえりりさくさうがうくと







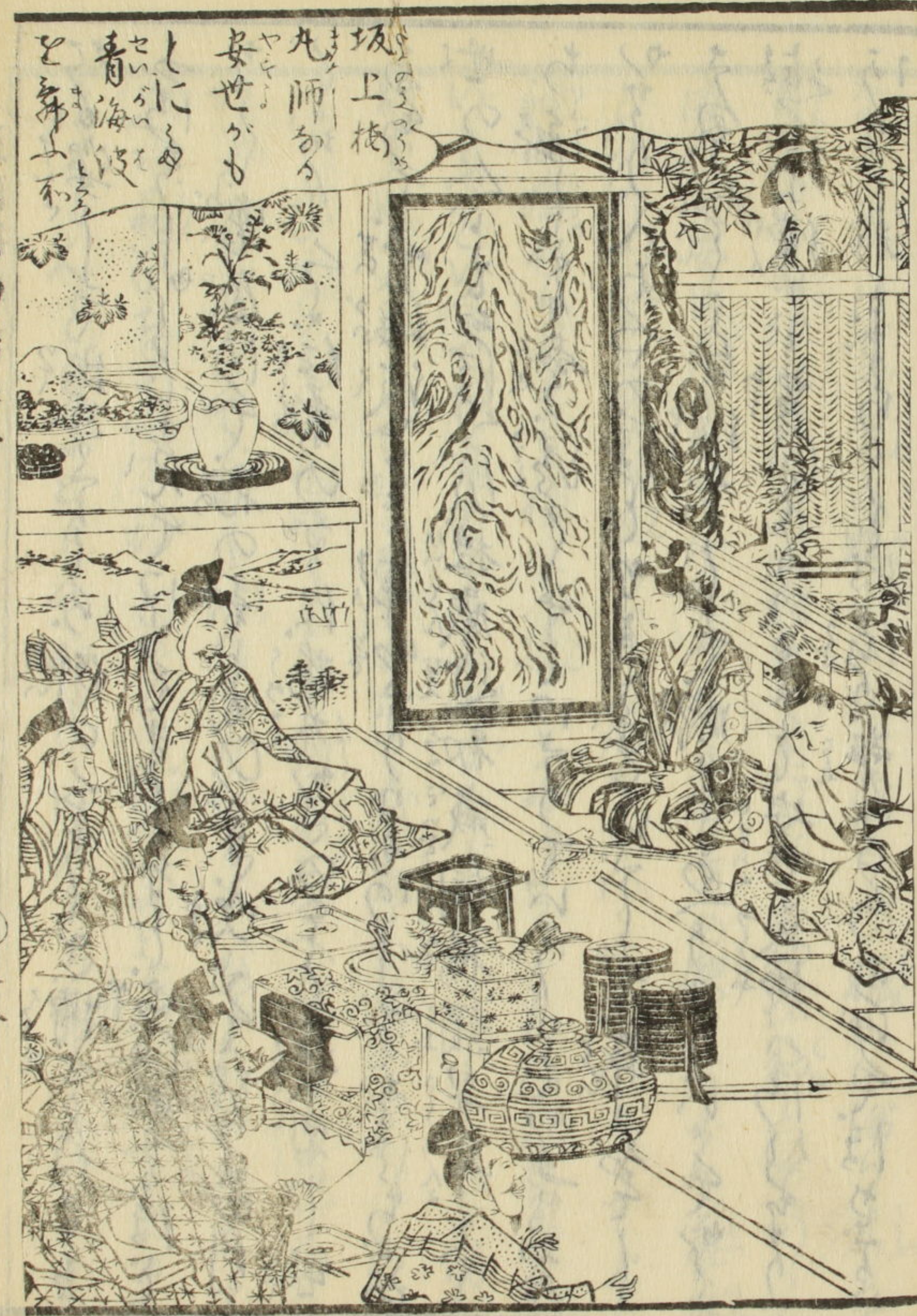
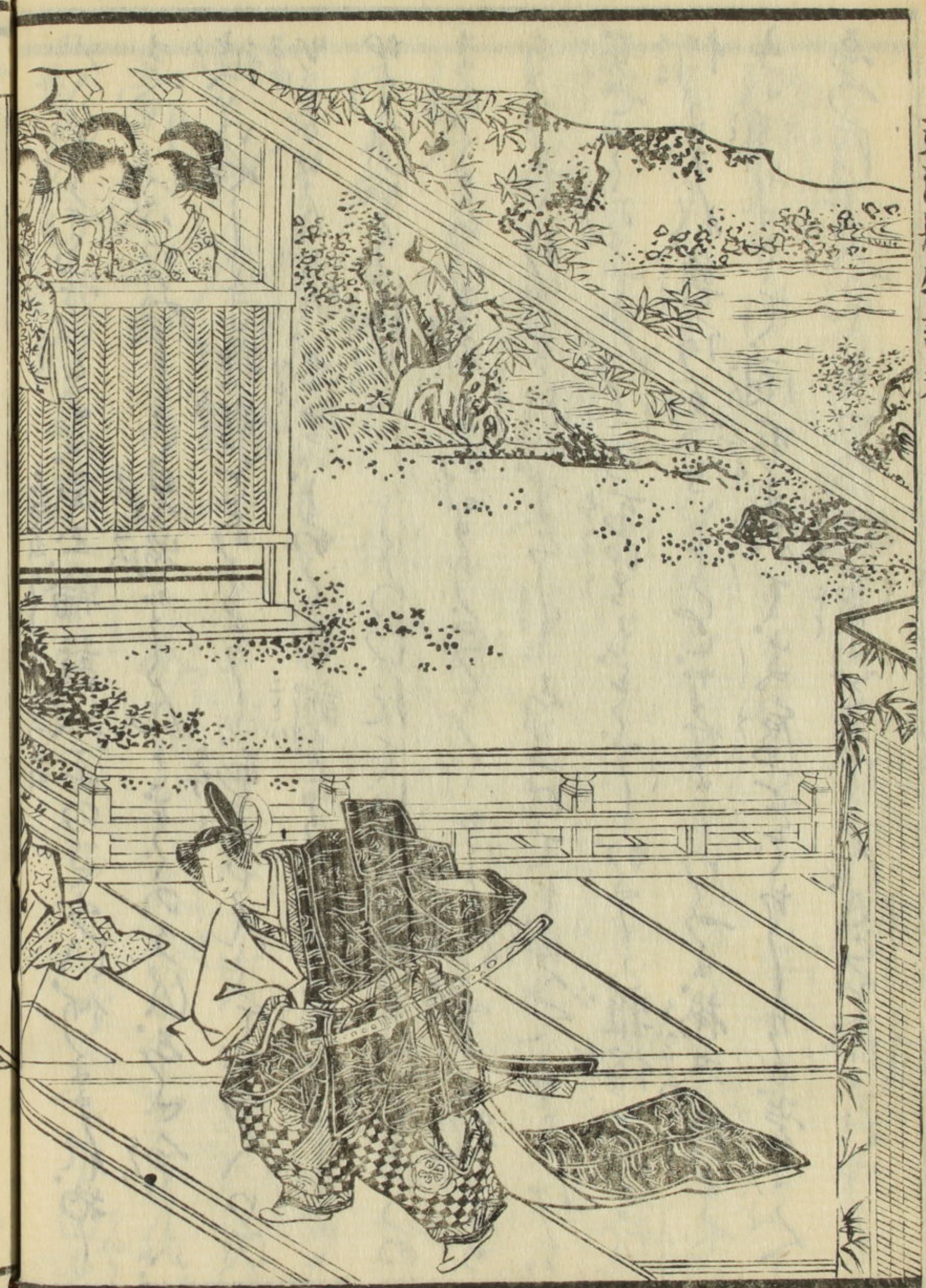
ふらぶのやうに  
藤原保輔  
強盗となり  
民間の男女を  
奪ひとり  
同族と共  
なしみを  
なす

江二系切五巻一

江二系切五巻一

十一





坂上梅丸師あり  
安世がも  
しに  
音海  
と













けねおきより一年をうりたに若人園生よんがけりぬ  
うまがむくつけ女ひとりかこひて艶書と梅の枝をつけて  
おろりつらうきる園生もつらで折れしきききておきり  
あはれ事におりひてやぐて艶書とよめまき返一つもい  
こそ梅もむすびはけてやりける。

なう垣あつるをぞくもつらで梅ぐのりぞくつあも  
あはれひきわらんこそやとぞ書る常人こちあきん  
ふも此あつらうきるづらんやと折るうりぞ我といふ  
よこそそそ甚後いふそつひもせざるなる此はきと知りひ  
はれそ。うりくすきやうこそあれとて又かのむくつけ  
女ひとりひく園生が園は秘めある梅丸が聘物とておろり

たの袋物ぬすむれよとのひたれ此女おきりあて  
やそくこしてけあて園生が湯ひきとるひ田とらひ  
かの一品をぬすみめておとらよやいひそよ常人は  
つらトラス常人よりらびて中ぞたひききえん紐の  
踏びり紙うりそそひきゆひく又の日梅丸が  
ととれ行てえけるはあはれ園生と婚姻あふ  
あはれわあつらうあひすすしなくそんは但おろり  
事のかを告まわつ塔ゆつびはうご後のあつみせ  
失ふ道理われば同くひそく若きゆきとめあは  
いふ伯父なる人あはれと婚と定りてめせ若きとい  
なる不存よんをわいごうみあつて夫婦のあ

りひの親おやのちの心こころもゆるすべしとつづれれども、  
 渡りなれども、  
 田舎いんがの家いへの妻つまとやういふ人ひとに、  
 かくいひて、  
 妻つまとやういふ人ひとのせめての、  
 我われハ梅丸うめだまが  
 昼夜ひるよをたづねて、  
 梅丸うめだまが  
 梅丸うめだまが  
 贈り物おくりものとて、  
 やりたくぬまじき、  
 渡りて、  
 梅丸うめだまが  
 手てに、  
 吾名わがなの梅丸うめだまと

りひの親おやのちの心こころもゆるすべしとつづれれども、  
 渡りなれども、  
 田舎いんがの家いへの妻つまとやういふ人ひとに、  
 かくいひて、  
 妻つまとやういふ人ひとのせめての、  
 我われハ梅丸うめだまが  
 昼夜ひるよをたづねて、  
 梅丸うめだまが  
 梅丸うめだまが  
 贈り物おくりものとて、  
 やりたくぬまじき、  
 渡りて、  
 梅丸うめだまが  
 手てに、  
 吾名わがなの梅丸うめだまと

近江縣小言卷一

〇廿六



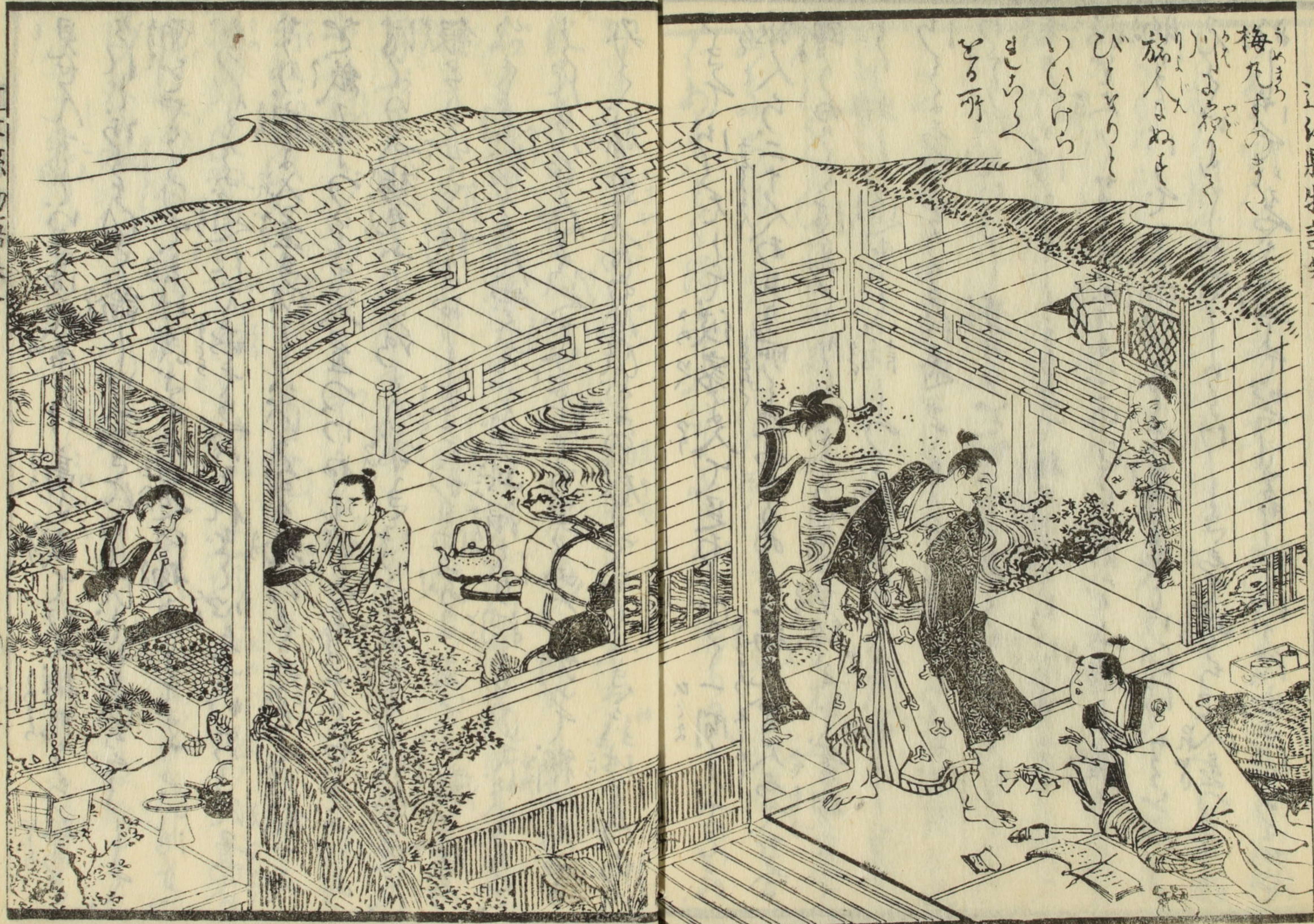




らある里方うらのみおアアアアつ、おゆさるるこの比春為海  
ほおもも義なきらうづれくゆくりびりさとしくむさうこ  
りりめもさるる風ふ谷川乃み勢たうゆえたうむらの  
ゆらひまもなき、龍姆一さびく、薩かすあどのぬれをばち  
てらひちがふねびのちこげよ見ゆるもあされなりからう  
しすのまこいりいりぶつさるるに、世比のあふさうこま  
うらえ、海りをさめさうとせがてせんすぶかく、ま体ひる  
るみこたさあるあやの歌に人あやの声まれを何から  
んとらうひるるふ海りをさめられ、橋人どもみな  
あふら海りをさる、こよひ乃らあよ氷ら海ねぐさ  
むあまはらう、海ぶられさあも、あふおりあし人のりふ

つまそ、けつたして、彼家へ入て、足あひく、一間へ入て、えん  
旅人ら二十人あり、所々にあざりあざり、梅丸會尺あて、かま  
躑うあるる、はとく、やうらうらう、おとち、おとち、筆硯など  
とり出、道あが、前うつ、詩書おど、思ひ出、すく、あす  
し、もあつ、どり、もた、道あてり、ある、火うち、袋を、膝、も  
あてり、に、え、ち、置、り、る、と、か、え、よ、基、ら、ち、あ、る、旅、人、乃  
有、り、れ、が、ば、ら、く、し、も、り、き、て、梅、丸、が、火、うち、袋、も、ま、り、わ、け、て  
眼、と、ま、く、さ、う、て、え、る、は、こ、の、ひ、ら、ち、城、あ、ら、う、道、を、我、り、ら、つ、  
物、な、り、い、い、ぞ、と、お、の、か、こ、ら、に、置、る、ぞ、と、い、ひ、け、か、う、と、い、ま、  
ん、く、い、よ、く、あ、や、一、り、け、し、も、あ、て、此、ら、に、入、る、つ、る、物  
ね、し、ら、て、い、ち、ち、ち、盤、を、さ、ら、う、あ、ら、し、ら、ん、た、あ、ら、い、は、ま、お、だ

梅丸すのまゝ  
川よ宿りて  
旅人よぬき  
びとぞりし  
りいりけら  
ましんく  
とる所



近江縣物語

見せんすといきほれ居がけ高は成てり梅丸らち駈馬き  
 多れど何れもいへ論トよりべきにわづらひとかりひめがし  
 面をやらふけてえけらばそい道の物まをそまふひはこ  
 おのれもろ道にておてつばをれをこ心えてがらうに置て  
 たり内に入直まひいづくる物にそくうらるる銀一兩  
 を紙一つとして入直つづねいをまをせんやとあのみ  
 けりりよ梅丸ふとろめらう小きけり取中らうひの死て  
 銀より出く紙よ和巻てがらまはまをそ疑を蒙り  
 めくやめらうらんやもゆをひ此根より測りひてはいり  
 とれまつめんといふたをとりまを納りそ精らあ  
 みく駈馬もわづらひおのれさてあへまははらあ

かいら盗人のちひありて物奪やとまきくおれもその目  
 にこそしつやとてかいらやと決まぬくす町たれから  
 おく鳴やぬ梅丸はるるの人の乃おりえ所もを所  
 かいら面わくならてむま向ひりまがし首てかの  
 男がそび暮らたんとて盤一むひりる石のる筈乃  
 ふと取てかむむける中より火うち袋さりとあぼそ  
 出ぬむひわる男とて手に死て是をこばらうひま  
 物あひやとつた取ひひき見たり中に銀ありおのが  
 おぼくあ友古乃紙一して包ておれはまがふかやうに  
 少れは旅人さうさひてまらうつる俵はわぬ物なり  
 らんとおむき取ていふくがりてがらうてり

人をさうかいておひ人としひれん今あらうびるた彼  
もとびいりくまきりて不便なる事なりあるらふのとこ  
おげく梅丸が傍らちい来てされたる思ひごとくであらぬ  
事申かけてゆひきおのが火ひら袋のく似てはやくと  
ふまきりてとせや中々てゆ今うーやひつ物ハ見つけ出て  
少くはかりのふ返しとあつてさうとさうとさうとさうと  
申してゆとせやとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
ゆとせやとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
人をさうかいておひ人と悪名をつけてのありととある  
屯くゆるとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
はくりさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

いふを梅丸身にもいれでうあみてかの男に向ひてさ  
それごとと盗人とおぼされしゆとさうとさうとさうとさうと  
さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
うとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
すうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
新んぬんにおほせやとさうとさうとさうとさうとさうと  
しむかの男はうらつてさうとさうとさうとさうとさうと  
かかつて見やして擔うらちもあき男うねびひひりや  
おどかしてさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
詞すうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

かきた年のは六十余ある人京家の武士と見えて供人  
 おまじつたるが始終を夢の如くおぼしめし梅丸がまは  
 来りてまじりて感入る由心底までせりわたくしおぼし人  
 乃かむりぬむとのどうにさあめ多ししものつねの人と思ひ  
 多うれすりらりて乃直不疑が故事にもまじりておぼし  
 くおぼしきいふる人といづく物語は後縁をたてし  
 一うらうらうの物語も多しし梅丸がのれ近江國を  
 おしちしども親族もなすしは今日より遠江國を交りて  
 ありてはバガ一とておぼしきゆかりしりしはさうばか子  
 けくおぼしきなすだらぬいふるをたのめしけり  
 子といふものやうて世中たのめし過しおぼしき行ふ

遠江國の人もさまであつたゆかりおぼしきいふる  
 一とものおぼしきひて都にのぼりておぼしき乃ゆり  
 けり物一奉らんおぼしきゆかりを梅丸はおぼしき  
 ためしきおぼしきゆかり人のおぼしきゆかり  
 かも人はおぼしきひて都をゆかりおぼしきゆかり  
 きていひひるおぼしきゆかりおぼしきゆかり一族と  
 けりゆかりおぼしきゆかりおぼしきゆかりおぼしき  
 うの武士はまじりておぼしきゆかりおぼしきゆかり  
 してゆかりおぼしきゆかりおぼしきゆかりおぼしき  
 にはゆかりおぼしきゆかりおぼしきゆかりおぼしき  
 都にのぼりてゆかりおぼしきゆかりおぼしきゆかり

のまきまひさく物語をて今ひひすつらむのれはまゝ  
 おぼろふまゝにわくせどなむらひまゝにわくたのしく  
 淡ぼろくともあれぬ物のついで後者多ものま向ひ  
 とのいふも西方まゝを嵯峨野のまつりて住ま  
 むしはいらりまき武まをりりれど今世のまどりもま  
 ろりまゝがまかり住まり世よハ差我の左衛門とすん  
 てまろりといふ梅丸あひるはいづもあれまゝこの人  
 かをせどたのりくうれあむぼろくともこれなり此人  
 はたてどろり此國をぞりり居

近江縣物語卷之一終

